

ヘレナ・レイルノートは侯爵令嬢である。

日々、宮中侯と呼ばれる宮廷内の監査官を務める家系であり、名門と呼んで過言ではない。遡れば広大な版図を持つガングレイヴ帝国が、未だ小国として周辺諸国と諍いを繰り返していた頃から仕えていたのだ。

だが何故か、そんな名家の令嬢たるヘレナは、二十八歳独身、そして軍人である。

「ふあ……」

ガングレイヴ帝国における武の頂点、八大将軍が一人『赤虎将』の副官ヘレナ・レイルノートの朝は早い。

日が昇る前には目を覚まして起き上がり、それから起き抜けの軽い鍛錬を行う。ある程度汗が流れるくらいに動いておかねば、朝から万全の体調で動くことができないのだ。

まず腕立て伏せを行い、それが二百を越えたあたりで腹筋に移行する。それも同じく二百程度を数え、いい汗が額に浮かんできたあたりで、外に出てもおかしくない程度の動きやすい服に着替えた。

そして何をするかというと、宿舍の周囲を走るのである。

ヘレナは帝都に屋敷を構えるレイルノート侯爵家の娘だが、実家には年に二度帰る程度だ。周辺諸国との小競り合いでもあれば、年に一度も戻らないということさえ珍しくない。

代わりに、ヘレナの所属する赤虎騎士団の駐屯所に隣接する宿舍で寝起きをしているのだ。

「やあ、ヘレナちゃん。おはよう」

「おはようございます！」

「今日も精が出るねえ、ヘレナちゃん」

「ありがとうございます！」

帝都の通りを走りながら、ようやく商売を始めようと店を開く者たちと、そのように挨拶をしながら走る。

毎日のことであるために、彼らにしてみてもヘレナが走っているのは当然のことなのだ。そして、ヘレナという名前は知っていても、彼らの間では「軍人のヘレナちゃん」くらいの認識であるために、彼女が貴族令嬢だということを知る者はいないだろう。少なくともヘレナが教えない限り、彼らが知る由などないのだから。

走り終え、肩で息をするようになってから部屋に戻り、それから湯で体を拭く。さすがに、汗臭い体のままというわけにはいかないのだ。

そのまま、次は朝食だ。

「おはよう、諸君」

「おはようございます、ヘレナ様！」

宿舎の食堂で、騎士団の面々と共に朝食である。

そして、食べ終えた頃にもヘレナの上司である『赤虎将』ヴィクトル・クリークが来なければ、溜息を吐きながら起こしに行くのも日常だ。ヴィクトルは將軍として相応しいほどに強く、そして知略にも優れるのだがとにかく朝に弱いのである。

そんなヴィクトルを叩き起こして、それから午前中の訓練だ。

二日酔いで頭痛を訴えているヴィクトルを無視して將軍執務室に突っ込み、そのまま山盛りの書類と格闘させる。そして、ヘレナは書類になど触れることなく、ヴィクトルの代わりに騎士団の兵たちを鍛え上げるのだ。

「突撃いいいい！！！」

「うおおおおお！！！！」

ヘレナの号令と共に突撃、迎撃、そして乱戦における訓練などを繰り返す。

そして全体の体力作りとしての基礎訓練も行わせ、最後に全員で駐屯所の周囲を走れば昼、といったところだ。

昼食も駐屯所の食堂で普通に食べて、午後からも同じく訓練を行う。ちなみに午前は基礎体力作りと集団行動訓練だが、午後からは個人の戦闘訓練である。

一小隊ずつ、ヘレナと模擬戦を行うのだ。

「はあっ！」

「遅いっ！」

模擬戦用の木剣で、襲いかかってくる兵の木剣を叩き落とす。

未だ副官の身ではあるが、八大將軍にすら劣らないと言われるヘレナは、まさに戦場における武に特化した存在だ。ゆえに、敵が十人いたところで連係がとれていなければ、まともに相手をするこすらできないのである。

それを午後だけで、二個大隊―十人ずつの戦いを二百回ほど行って、本日の訓練は終了だ。

そして訓練を終え、疲れた体に一番の薬は酒である。

「乾杯！」

「かんぱーい！」

ヴィクトルや馴染みの面々と、よく行く酒場でそう杯を合わせて、一気に呷る。

安い麦酒が喉を通る感覚が心地よく、くーっ、と意図せず声が漏れる。

それを五杯ほど飲んだら、最早意識は酩酊して全く働いてくれず、気付けば眠っている。それを、呆れた顔でヴィクトルが背負って、部屋まで運んでくれるのだ。ちなみにそんなことを毎日のように繰り返しているけれど、ヴィクトルが妙なことに及んだことは今まで一度もなかったりする。

「むにゃあ……もつとお、のむんだあ……」

「あー、もう、さっさと寝ろ！」
ヴィクトルにそうやって寝台に寝かされて、そのまま朝まで一度も起きることなく眠る。
ヘレナの毎日は、そんな風に変わることなく過ぎてゆくのだー。

◇◇◇

「……とまあ、軍にいた頃はそんな生活でしたね。いや、毎日充実した日々でした」
「……」
と、そのように。

目の前にいるガングレイヴ帝国の最高権力者、皇帝ファルマス・ディールルクレツィア・ガン
グレイヴに向けてそう話す。

軍ではどのような日々を過ごしていたのだ、と質問をされたために、素直にそう答えてみたのだ
が。

何故かファルマスは、呆れたように小さく溜息を吐いた。

「そなたは……」

「はい」

「……本当に貴族令嬢なのか？」

「……多分？」

ヘレナ・レイルノートは侯爵令嬢である。

多分そうであるはずだ。一応レイルノート侯爵家の令嬢であるはずだ。
だというのに。

なんだか自信がなくなってきた。